

白雲片片

第十二回

りゅうざん おしろう 竜山和尚

今回は竜山和尚、洞山良价禅师、山僧密禅师が登場する古則を紹介致します。

正法眼藏三百則 第二百二十二則

『潭州竜山和尚、洞山、神山と行脚す。谿流の菜葉を見て、山云く、此の中に必ず修行の人有るべし。遂に往き尋ね

て庵主に見ゆ。師問う、此の山は路無し、二禅客は甚麼の処従りか来れる。山云く、路無きことは且らく置く、和尚は何れ従りか入りし。師云く、我れ嘗て雲水より来らず。山云く、和尚の此の山に住すること多少の時ぞ。師云く、春秋渉らず。山云く、和尚の先ず住せりや、此の山の先ず住せりや。師云く、知らず。山云く、甚麼と為てか知らざる。師云く、我れ人天の為めに来らず。又た問う、和尚、何なる道理を得てか此の山に住する。師云く、我れ見る、兩箇の泥牛の鬪いて海に入り、直に如今に至りて消息無きことを。』

現代語訳／「師」は竜山和尚、「山」は洞山良价禅师。

現在の中国の湖南省にある長沙とい

う町は昔、潭州とも呼ばれていました。その潭州に住んでいた竜山和尚の話です。洞山良价禅师と山僧密禅师が一緒に旅をしていました。二人が川のほとりを通りかかった時、川上から野菜の葉っぱが流れてきました。それを見た洞山良价禅师が言いました。

山「この山の中には必ず修行僧がいるはずだ。」

二人がその川をさかのぼると、粗末な家に住んでいる修行僧に出会いました。

師「この山には登ってくるような道はないはずだ。あなた方二人は一体どこから来たのか。」

山「この山には道がないという事はとりあえず棚上げしておきます。和尚さんは、どこからこの山に入ってきたんですか。(和尚さんが仏道の真実に入り込んだ状況が知りたい)。」

師「私は雲や水から来たわけではない。人間として普通に歩いてこの山に入ってきた。(少しづつ修行を重ねて今日に至った)。」

山「和尚さんはこの山に住んでどのくらいの年月が経ちますか。」

師「春がきたとか秋がきたとか、そういうことにはあまり関心を持たずに、

ただこの山の中で暮らしていた。」

山「和尚さんが先に住んでいたんですか、それともこの山が先にあつたんですか。」

師「そういうことは分らん。」

山「そんなことも分からないということはないでしょう。」

師「私は人間世界や天上の神々のためにこの山に入ってきたわけじゃない。」

(直接の動機は誰かのためじゃなく、仏道修行のために入って来たんだ。)

山「和尚さんは仏教のどういった道理を得てこの山に入って暮らしているのですか。」

師「自分の中では二頭の泥の牛が争っていたが、海の中に入って行ったら泥で出来ていたから溶けてしまった。それ以降は、私は現在という瞬間に生きていて、二頭の泥牛がどこに行つたか全く分からない。」

――
竜山和尚は馬祖道一禪師の弟子だったようですが、一生山の中で暮らして世間に出てこなかったらしくほとんど伝記がありませんでした。そのため別称は隠山(山に隠れる)とも言います。

毎回参考にさせて頂いている西嶋和夫さんの解説を見ると、最後に竜山和尚が言っている二頭の泥牛というのは、人間が持っている精神的な欲求(褒めて欲しいなど)と肉体的な欲求(経済的、物質的に充足させたいなど)が譬えられたものだと思います。

人間は誰でも褒められると嬉しいので褒められるような偉い人になりたい、でも損をするのは嫌だ、でも損得ばかり考えていると世間の評判が悪くなる、世間の評判が悪くなると人から褒められたり尊敬されるような偉い人にはなれそうにない、だからといって世間の評判ばかり気にしていると今度は経済的な苦勞が絶えない。こういう誰にでも起こりうる板挟み状態が二頭の泥牛が争っている状態だと思います。

――
竜山和尚の「直に如今に至りて消息無きことを」という言葉は、「今となつては泥の牛がどこへ行ったか分からない」という意味があると同時に、「今という瞬間に生きられるようになってからは、人から褒められたり貶されるとか、損得などは気にならなくなつた」という意味もあると思います。自分が

今やるべき行動に徹していれば、人からどう思われているとか、どう評価されているかとかは大した問題ではないことです。その状態になるためには日々坐禅をして今に集中して生きる人間を育成し、落ち着いて安定した状態にしておくしか他に道がないということになります。落ち着きがないと周囲の目や行動に振り回されてウロウロすることになるでしょう。一度しかない人生なのに目先の損得勘定に終始してウロウロして過ごすのは何とも哀れなものです。坐禅を修める一端にはそういったことをできるだけ回避するためという意味も含まれていると思います。

――
勿論、人間社会の中で生きていくには人からの評価に注意していかない自分立場を保持できないという事情もあるでしょうが、毎日坐禅をして落ち着いていられる自信を持っていけば、それほど周囲に振り回されたり、よく分からないからとりあえず人に付いていこうという軽率な行動をとることも少なくなるのではないのでしょうか。

参考文献／西嶋和夫著「真字正法眼蔵提唱下巻一」、駒沢大学編「禅学大辞典」